

研究課題 (テーマ)		第二言語文理解における記憶容量の影響		
研究者	所属学科等	職	氏名	
代表者	教養教育	准教授	須田孝司	
研究結果の概要				
<p>本研究では、初級・中級の日本人英語学習者を被験者として英文の読み時間 (RT) を測り、その学習者の作動記憶 (WM) 容量や英語の習熟度の違いが文処理にどのような影響を与えるのか調査を行った。</p> <p>実験に参加した被験者は、30人の日本人英語学習者 (mean age 19:03) である。本実験を行う前に日本語のリーディングスパンテスト (苧坂, 2002) により被験者の WM 容量をあらかじめ測定し、その結果を元に被験者を Low と High の2つのグループに分けた。また、英語の習熟度についても、Quick Placement Test (Oxford University Press, 2002) により被験者を中級と初級の2つのグループに分けた。</p> <p>実験では、(1) のような2つのタイプの強調文 (各 10 文) を使った。</p> <p>(1) a. <T1> It was John_i that t_i was printing the card then. b. <T2> It was the card_j that John was printing t_j then.</p> <p>(1a) は従属節の主語が強調された主語強調文 (T1) であり、(1b) は目的語が強調された目的語強調文 (T2) である。</p> <p>実験では、心理実験ソフト (E-PRIME) を使い、英文を1文単位でコンピューター画面に提示し、その文の文法性判断にかかった時間を RT として分析した。</p> <p>実験の結果、英文の文法性については、全てのグループが 80%以上の割合で正しく判断できており、正答数についてはグループ間に統計的な差はなかった。一方、RT について分析すると、初級グループでは、WM 容量の低い Low グループの T2 の RT が遅く、中級グループの場合は、WM 容量に関係なく、T2 の RT が遅くなっていることがわかった。また、分散分析を行うと、習熟度によるのみ有意差がみられ、初級レベルの学習者の RT は、中級レベルの学習者の RT より有意に遅いことが明らかになった。</p>				
今後の展開				
<p>WM 容量を元にした実験では、日本人英語学習者の文処理過程についてはっきりとしたことは言えないことがわかった。そこで、今後は WM 容量ではなく、習熟度を元に被験者のグループ分けを行い、第二言語の習熟度の違いが文処理過程にどのように反映されるか検証することを計画している。</p>				